
コンピテント / ガラスノコドモ

Yoi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンピテントノガラスノコドモ

【Nコード】

N6879G

【作者名】

Yoi

【あらすじ】

平穏だった学術都市、筑魔市で起こる連続殺人事件。殺人現場で目撃される、腕に包帯を巻いた少女。彼女を偶然目撃した少年は、驚愕の表情でこう呟いた 『……………コンピテント……………！』。少女は一体何者なのか？そして、その背後にある巨大な陰謀とは？

chapter 1 : プロローグ / 冷たいひと

それはすでに、夜も遅い時間。

金曜の夜。周辺の家々の窓のからは、明かりもすっかりと消えてしまっていた。寝静まった住宅地の通りは思った以上に暗い。一步踏み出すのを思わず躊躇してしまうほどの深い闇が辺りを包んでいた。だが、そんな暗闇の中を、どこへ行くのか、一人の少女が、こころもちせかせかと歩を速めながら、道を急いでいた。

「……………これで、今日も許してもらえる」

少女は安堵していた。使い込まれたボロボロの学生かばんの中には、その日の“戦利品”がクリアファイルに挟まれて大切に収められていた。むやみに揺すって折り曲げたりしないように、少女は道を急ぎながらも、絶えずそれを気にしていた。

家から出た時とは反対に、その足取りは軽かった。出た時は、その日、それから先に待ち受けている出来事を想像して胸が張り裂けそうだった。だが、その日一日をどうにか終えようとしている今は、とりあえず最低限の仕事をやり遂げた満足感に胸は躍っていた。

家は、それでも彼女にとって居心地の悪い場所であることに違いはなかった。あの父と同じ建物の中にいると言っただけで、少女はある種の息苦しさを感じた。毎日が、不安だった。あの感情のほとんどこもらない冷たい声が、いつ、役立たずと言って彼女を家から追い出してしまうか、そればかりを絶えず心配していた。それは、もしかすると単なる杞憂かも知れなかった。自分が父にとって欠かせない、必要な存在であると言っことを、もっと信じてみたいと少女は思っていた。

でも、お父さん、私を名前で呼んでくれたこと、何回あっただろう。少女は思った。

おかえり、と言って上辺だけ笑ってみせる、本当に笑うことを知らない灰色の瞳。あれを見る度に、私の希望は、いつも打ち砕かれてしまう。人を人とも思っていないような、あの冷徹な視線。見守るといふより、あれは……。

「……『観察』」

少女は小さな声で呟いた。

想いだしてみただけで、背筋が凍った。

父は、私を、愛していないんだ。

痛いほどに解っていたつもりだった。だが、他に帰るべき家もなかった。父と呼ぶべき人も、他にはいなかった。生きているのが楽しいと心の底から思えたことなど、考えてみれば産まれてから一度も無かった気がした。私、生きている意味が、あるのだろうか。役目を終えて家に帰ろうとすると、最近特に、無意識にそればかりを考えてしまった。

物は、いつも前もって意義や目的があって作られる。では、命には何か目的があるのだろうか。それとも、何の目的もなく産まれるモノこそ、命なのだろうか。それなら、命とは、そもそもが、無計画で、無軌道なものなのだろうか。生まれてきてから数十年の時が過ぎて、まだ道に迷ったような気分、しばしば、苛まれてしまうほど。

「……私、どうして、ここに……」

暗闇で、少女が呟いた。

死んでしまっても、誰かの記憶に残り、そこで生き続けることを希

望する人もいる。だが、彼女には、それすら期待できなかった。彼女が死んで、後で思い出し、涙してくれるような人など、あげると言われても、すぐには思いつかなかった。死んでも、本当に後には何も残らなそうだった。このままでは、存在したこと自体が、無いこととほとんど同じになってしまいうさだだった。

それだけは、どうしても嫌だった。

『わたしは生きて、ここにいた！』その事実を、彼女は何かに刻みつけたかった。

カバンの取っ手を握りしめる左手に、思わず力が込もった。硬質ゴム製の取っ手が、手の中で呻くように、ぎい、と小さな音を立てて泣いた。

彼女が生きたという、その記憶を留めておいてもらうのに、考えつく唯一の人物はやはり、父しかいなかった。せめて、彼以外の誰かであつたらよかつたのに、とは、彼女も思っていた。だが周りには、本当に、他には誰もいなかったのだ。愛してくれる人も、信賴の眼差しで見つめてくれる人すらも。いるのはただ、彼女を『觀察』する父、だけだった。

しかし、その父ですら、彼女が一番大切というわけでもないようだった。父は彼女より、むしろ彼のもつ“硝子の器”の方によほど愛情を注いでいたのは、火を見るよりも明らかだった。

奇怪な器具で散らかった父の作業機の脇に、ひっそりと置かれた、丸みを帯びた硝子の器。美しく磨かれたその機具を、父は愛でるようにじっと見つめていた。そういうときの父は、彼女が話しかけても、ずっと上の空に聞いていた。曇りひとつない、ガラスの器と向かい合って、心のうちで何かを語りかけるように、にやにやと薄気味の悪い笑いを浮かべる父。

彼女は、そういうときの父に対して、なぜだか、憎しみに似た感情が沸き起こるのを知っていた。それは、父の愛するガラスの器への嫉妬なのかもしれない。器に対して父が見せる気配りと、優しさを持つて、もうすこし自分を見てくれたなら……。そういう気持ちだが、考えても愚かしい、その感情の発端なのかもしれないと気がついていた。

「……私をきちんと見つめて、名前で呼んでくれたことが、何回あった？」

名前は、父が付けてくれたものではなかった。そのためか父は彼女を名前で呼んでくれたことがほとんど無かった。少女は、それをひどく気に病んでいた。

普通の家族というものを知らなかった。昔から、父はこんな感じだった。用がある時以外、彼女を近くに置かず、後はほとんど、ほったらかしだった。

そのような生い立ちのせいなのか、街を歩くと、今でも目は自然に並んで通りに行く親子連れに止まった。覚束ない足取りで、よちよちと支えられるようにして歩く幼い子供ら。そしてその傍らで、い

つもその様子を首を傾げるようにして見守りながら、寄り添うように歩く母親たち。母と手をつないで歩く子供は、いつも嬉しそうで、ここにこと朗らかに笑っていた。子供をそのように微笑ませる何か、手を繋いだだけで、両親から子供へ流れ込んでいるのかもしれない。彼女にはそう思えて仕方なかったが、それが具体的に、何であるかは、彼女には解らなかった。

もしかすると、彼女は解らないのではなく、忘れていただけなのかも知れなかった。ずっと遠く、もう、消えてしまいそうなほど遠い記憶の中に、誰かの大きく温かな手で、自分の小さな手を包まれた感覚があるような気もした。穏やかで、優しく、考えただけで思わずうっとりとしてしまうような甘い記憶。それは、幼い頃思い描いた、妄想の一種なのかも知れなかった。だが、妄想と言うには、あまりにそれは身体に染みついた記憶のように思えた。

まるで、あのとき優しくさすられていた右腕の皮膚が、未だあの大きな温かい手を覚えていたかのように、その感覚が次第次第に身体のうちで蘇ってくるのを、彼女は感じていた。本当に長い間、忘れてしまっていたその感覚をもっと詳しく思い出そうとして、少女はいつの間にか、無意識に泣いてしまっている自分に気づいた。

「……お母さん……」

闇の中に、静かな嗚咽が聞こえた。

彼女は、遠くを見るような目で自分の右腕を見つめた。その腕には、厚く何重にも包帯が巻かれていた。一人になると、この腕はいつも締め付けられるように、じりじりと痛んだ。

「この腕さえ、なかったら……」

彼女は右腕を恨めしそうに見つめた。

この腕がなかったら、私は普通の女の子として生きていけるのだ。父に怯えて暮らすまでもなく、同じくらい、あるいはもっと大切な人を作ることだって、出来たはずだった。

でも……。

そこで、ふと冷たい声が聞こえた気がした。

……そもそもは、この右腕を生み出すために、私は生まれたのではなかったか？

痛む右腕を見つめながら、彼女はふと、そう思った。そして、その後から、こみ上げるように湧き出したおかしさに我慢がきれなくなつて、おなかを抱え、身をよじるようにして笑い始めた。

考えてみれば、当たり前前かも。

この右腕のために、私は生かされている。私のために、この右腕があるわけじゃない。

父がいつも見つめているのは、あくまでこの右腕なのだ。私は、これを生かすために、全身で、この腕を養っているだけの存在なんだ。

“お帰り”は、この腕に向けて、言っていたんだ。

少女の笑いは、いつしか悲壮な笑みへと変わっていた。

「……早く、帰らなきゃ」

父が、「腕」の帰りを待っている。

少女は耐え難く自虐的な思いに浸りながら、息苦しい家に向かう歩みを、わずかに速めた。

「……よお、姉ちゃん？」

その時、暗闇から突然、聞きなれない男の声があった。

chapter 1 : プロローグ / 予兆

あまりに唐突だったので、少女ははじめ、それが自分に向けられた声だとは気がつかなかった。

「……………すましてんじゃ、ねえよ」

男の声に、暗い怒りが混じったのに、少女は気づいたはっとして背後を振り向いた。

点々と続く街路灯の明かりの中に、背の高い、若い男の影が見えた。

「……………何やってんだい？こんな時間に。ご帰宅？」

男の恰好はよくわからなかった。だぶだぶに来た服のシルエットが、薄暗い街路灯を背に、不気味に浮かび上がっているだけだった。

「……………何？この人？」

恐怖が、背中を走った。冷たい汗が、脇の下を流れて落ちた。

無意識に、半歩ほど後ずさった。

どん。

背中に、

何か固いものに当たったような衝撃が走った。

彼女はおそるおそる、背後をふり返った。

暗い、大きな壁が見えた。

「……………？」

しかし、そこは道の真ん中のはずだった。壁など、あるはずがなかった。少女はゆっくりと壁を見上げていった。するとその先に、小さな頭が付いていた。

それは、少女よりずっと体の大きい、もう一人の男だった。

男の顔は、街路灯を背にした男より、まだよく見えた。考えがつか

めない、鈍重そうな大男で、何がおかしいのか、へらへらと薄気味の悪い笑いを浮かべて、小柄な少女を見下ろしていた。

「いたいなあ……」

男はそう言っていると、彼女の無傷の左腕を掴んで、高くひねりあげた。

「……は、放して」

弱々しげな声で、少女は言った。

「……へえ」

後から追い付いてきた男が、彼女のあごをつかんだ。

「こりゃあ……」

男はそういうと、彼女の顔がほとんど触れるくらいまで、彼の顔をよせてきた。男の口から、たばこと酒と、何か得体のしれない、耐え難い臭いが漂ってきた。無精ひげが、やすりのように皮膚を削った。彼女は苦痛を感じて思わず顔をそむけようとした。が、男の指にとらえられた首は容易には動かなかった。

「悪いコだな、こんな時間に出歩くなんて……」

顎をつかんだ男が、不吉な笑いを浮かべて言った。

「お兄さん、こう見えて真面目だからよ……、お前みたいなコを見ると、お仕置きしてあげたくなるんだよ……」

「……や、やめて」

口すら満足に動かせない少女の声は殆ど言葉をなさなかった。ただ青ざめた唇が震え、空気が漏れたにすぎなかった。

男の体が、彼女に擦りつけられた。男はそのまま、何かを暗示するかのように身をゆすり始めた。

身体を守ろうと、無意識に少女と男の間に挟まれていた右腕の白い包帯がほどけて、足元にはらりと落ちてしまった。だが、それに気づいたものは誰もいなかった。

「……離して！はなしてよ！」

少女は、激しく身もだえた。

「はあ……。そう、暴れるなよ。優しく、してやるからよあ……」

男は少女を愛撫するように、その頬を、ざらついた指でなぞった。

「……なあ、どうする……？」

鈍重そうな大男が、にたにたと笑ったままもう一方の男に尋ねた。顎をつかんだ男の顔が歪んだ。それは、彼の笑顔のようだった。強い粘り気を帯びた唾液が、痩せた犬歯の間で糸を引いていた。男は真っ黒い口を楽しそうに開けたまま、かすれた声で言った。

「かまうもんか、……さつさと……」

血走った男達の目に、そこからそう遠くない距離にある、明かりの少ない、暗く小さな公園が見えた。ブロック塀に二方を囲まれ、そこだけ、近隣の住宅からも見通せない死角になっていた。

男の口が、怪しくゆがんだ。

chapter 1 : ブローグ / こそばゆい肉片

おぞましい力で、嫌がる少女の手を引いて、彼らの影はブロック塀の裏に消えた。

汗ばんだ嫌な臭いのする手が、口をしつかりと塞いでいた少女は、悲鳴を上げることすら出来なかった。

彼らは、そうして闇に融けた。

何事もなかったかのように、夜はつづいた。本来の静寂の中に、どこか落ち着きのない、いびつなものを内包した時間が、知らん顔をして過ぎていった。

遠くで、電車の走る音が聞こえる。星のない夜だった。

ブロック塀の影に三人の姿が消えてから、10分ほどの時間が経った。

すべてを取り込んでいた暗闇から、少女がフラリと明かりの下に姿を現した。

頬は泥と涙で汚れていた。彼女は、それを砂にまみれた、白いブラウスの袖で拭った。

拭いたそばから涙が溢れてきた。少女は時折、袖で口を押さえて、むせび泣くような声を漏らした。

「……こんな事……」

男たちに奪われた鞆が、足下に転がっていた。

少女はそれを拾い上げると、蓋を開けて中身を確認した。

中の物は、何も無くなっていなかった。

少女は鞆の蓋を丁寧に閉めると、ふらふらと立ち上がって、再び、元来た道を歩き始めた。

右腕が、ずきずきと痛んでいた。

覆っていた包帯は、先ほど男たちともつれた最中に、何処かへ行ってしまっていた。

彼女は街路灯の下に立ち止まり、右手を何度か開いたり、閉じたりした。そして、左の手で、露出した右腕をいたわるように、やさしくさすった。

ちらちらと明滅する、薄黄色の街路灯の下で、突然明かりの下に曝された右腕は、まるで光に怯えるかのように震えていた。血のにおいが、辺りに立ちこめる。

彼女は右腕を押さえて、不安げに、夜の静けさに耳を澄ました。

それは、悪魔のような腕だった。

少女の右腕、中でも、肘から下の部分は、その身体に不釣り合いなほど隆々と、禍々しく発達していた。人の顔を覆い尽くすほどの掌。根本からさらに枝分かれした指。そしてその先に生えた無数の鋭い爪。まだ完全に乾ききっていない血液が、涙のように、その先端から滴っていた。彼女の意志に従って、静かに開閉を繰り返すその手は、さながら命を貪る野獣の口吻のようにも見えた。

鋭い爪と指の間に、血の滲んだ赤黒い肉片が、まだ、しっかりと詰まっている。少女は、血塗られた指先にこそばゆい違和感を感じて、思わず顔をしかめた。

袖の細いブラウスでは、その腕を覆い隠すことはできなかった。右

袖は肘がすっかり見えるほどに高くまくられていた。

「……こんな事、するつもりじゃ、なかったのに……」
血しぶきを浴びた顔がぼつりとつばやいた。

腕の先端から、上半身の一帶に至るまで、おびただしい量の返り血を浴びていた。鮮血に濡れた衣服が、身体に張り付いて、冷たく、少しぬるぬるした感覚がしていた。血液は、冷えた夜の外気に触れて、なお粘り気を増してくる。血液は糸を引いて滴り落ち、彼女の履いていた真新しいスニーカーに、暗紅色の染みを点々と残した。

突然、少女の背中が、電気が走ったようにびくりと震えた。
背後に、気配を感じた。

chapter 1 : プロローグ / 砕け散る赤いモノ

少女は、慌てて後ろを振り返った。

暗闇にいくら目をこらしてみても、誰の姿も見えない。血の気のない暗闇が、暗澹と少女の前に広がっていた。

だが、心の中に一度湧き出した恐怖は、なかなか消えないようだった。誰かが、その暗い闇の底から今しも、ぬうつと立ち現れてきそうな気がしてしよがなかつた。少女は怯えるような眼差しで、暗い夜の中、瞳だけが、あくせくと左右に動き続けた。

すると、見つめていたよりずっと上の方から、突然、カア、と、けたたましい声が出た。はっとして声のした方を見上げた。

暗闇の中で声の主の姿は見えなかった。空は未だ十分に暗かった。だが、彼女は目に見えて慌て始めた。東の空は、すでに少しずつ明るくなり始めていたのだった。

ざわめきは次第に大きくなってきた。

一羽が鳴き出すと、辺りに潜んでいた何羽ものカラスが、つられるように鳴き始めた。その喧噪は徐々に夜一面に拡がって、暗い空全体を覆い尽くしていくように感じられた。

「……帰らなきゃ……！」

彼女は地平線の下の方を背に向けて、少女は逃げるように駆けだした。

露出した右腕を、再び隠すことも忘れていた。

公園を取り囲むカラスの数は、夜明けが近づくにつれて増していった。耳を覆いたくなるほどの不快でけたたましい喧噪が、しばらく夜を覆った。

二体の、若い男のものと見られる遺体が発見され、警察に通報が入ったのは、それから2時間ほど後のことだった。愛犬と散歩中の老人がその遺体を見つけたが、その惨劇に彼は安心してしまい、実際に通報したのは、ちょうどその場を通りかかった早出の会社員だった。

遺体は、2方をブロック塀に囲まれた公園の隅に頭を向け、非常に近い位置に並ぶように倒れていた。遺体に争った後は無く、一撃で身を守る暇もないほど、あっという間に殺されたのだらうと刑事らは推察した。

しかし、その殺され方には、彼らも首を捻った。

遺体には、首より上が影も形も無かった。もし、首、があるとするならば、それは付近に散らばった、大小様々な肉塊や骨片が、それに相当するものと考えられた。彼らは、何か想像を絶する力で、頭部が頸髓ごと引き抜かれ、跡形もなく潰されたのだらうか？

それは信じがたいことだったが、状況から見て、彼らにも、そうとしか考えられなかった。

結局、この二体の遺体は、身元もはっきりと特定できなかった。

これと言った証拠も、解決の糸口も見いだせないまま、事件は公となり、マスコミの話題の種となった。

しかし、マスコミの周到な取材をもってしても、現場から立ち去ったはずの、一人の異形の少女の存在に、たどり着いたものはなかつ

た。

悲劇の真実は、
いまだ、
闇に閉ざされていた。

chap. 2 : 悪魔の仔/切り刻まれた空

右手に包帯を巻いた少女の姿が次に目撃されたのは、その事件から2日後の金曜の昼間だった。目撃した少年は、早瀬拓真はやせたくまという、当時17歳の少年だった。

拓真にとって、その日は、いつもと何の変わりもない、ごく退屈な一日になる予定の日だった。彼は、多くの生徒と同様に学校がそれほど好きではなかった。背が高く大柄で、何も語らずとも不思議な存在感を示すような生徒だったが、無口で、人と交わること好まなかった。

ややひねくれた所があり、学校でもクラスメイトの多くは、そうした彼を遠くから、時々からかって笑う以外は、積極的に交流を持つことはしなかった。故に、彼はいつも一人でいることが多かった。一人でフラリと教室に現れ、興味が有るのか無いのか解らない顔をして授業を聞き、終わればさっさと帰ってしまう。そういう生徒だった。

ただ、例外的にたった一人、彼に興味を持ち、積極的に話しかける生徒がいた。水貝すがい由宇ゆう。同じクラスの女子生徒だった。

水貝と拓真は高校に入ってから知り合いだった。一年の時から同じクラスで、付き合っていたわけではなかったが、比較的仲は良かった。水貝は男子生徒からの人気も高く、同級生達の中には、何とか彼女の気を引こうとしている者もいたようだった。だが、そうした生徒に対し、彼女はいつも素っ気なかった。その割に、彼女は周りにから変わり者扱いされる拓真とよく話していたので、何人かの男子生徒は彼や、あるいは彼女自身にたいして、軽い嫉妬心を抱いて

いた。

そのような事情もあつてか、やがて彼女も拓真同様に周囲から変わり者として認知されるようになっていった。実際のところがどうであるかと、一度そうしたイメージが知れ渡ってしまつと、彼女にわざわざ近づこうとする生徒は目に見えて減つていった。

彼女のことを比較的理解してくれていた数少ない友人のうちの一人は、彼女に悪いイメージが付いてしまつのを心配して、拓真と少し距離を置くようにことあるごとに忠告していた。だが、彼女は、いつもこう言つて、その忠告に答えた。

「確かに、拓真はすごく変わつてる……。でも、私の話を何も言わずに聞いてくれるのは、彼しかいないから」

そして、彼女はその後、言葉を補うように、こう付け加えた。

「……私の話、彼は余計な感想なんか、付けたりしないもの」

二人は、一緒に下校することが多かった。

拓真の側から彼女を誘つた事は、しかし一度もなかった。どちらかというと、いつも由宇の方が下校する彼に勝手に付いて行くというような格好だった。誰かが、たとえ彼らのそう言う場面に偶然居合わせたとしても、彼らが親しげに会話をする様子は全く見られなかった。由宇の問いかけに、拓真が時折、ああ、とか、うん、とか、ぼそりと答えるだけで、二人の間に会話らしい会話は成立していなかった。

だが、由宇はそれでも、そうした彼との下校を、再び同じクラスに入った高2の始め日から、ほとんど毎日のように続けていた。そのためもあつて、彼も始めの頃のように、邪険に彼女を突き放すような素振りは見せなくなっていた。

「……でね、マユってば、あの事件の犯人はきつと宇宙人だって言
って聞かないんだよ」

ある日の下校途中。学校前の道を少し曲がったところだった。車が
二台擦れ違うには少し狭い露地が、碁盤の目のように続いていた。
電信柱や電線のネットワークが、住宅の屋根の間から見える青い空
を黒く切り刻んで、見上げる者に、ただ溜息だけをもたらした。

憂鬱な街角で、由宇は楽しそうに笑っていた。

「あれだけの力を持った野獣みたいな生き物が、この街の真ん中に
やってくるなんて、考えられないって。だとすれば、地球侵略に
来た宇宙人位しかないんじゃないか、なんて、そればかり。私は、
全く信じてないんだけど、でも、最近、テレビのニュースも、まず
あの事件からはいるじゃない？中には、ホントに宇宙人説を信じて
る人も出てきてたりしてさ、なんか見てて、おもしろいを通り越し
て、ちょっとうんざりしちゃうんだよね」

彼女は、そう言うと、白い首を伸ばして、未だ日の落ちない青い空
を見上げた。背の高い住宅に狭められた空は窮屈で、そして、手の
届かないほどに高い。切り刻まれた空に向けて、彼女は指を逆さま
に組んで大きく背伸びをした。深い紺色の制服の、上着の裾が持ち
上がって、その下に身につけたブラウスの白い地が鮮やかに映えた。

「……宇宙人なんて、本当に、信じている人、いるんだね」

傷だらけの空を見上げたまま、彼女は呟いた。

chap. 2 : 悪魔の仔／神様のいないまち

「宇宙は広いから、確かに、宇宙人がいてもおかしくないのかも知れない。でも……。根拠のないものを信じ続ける位、私は強くない神様だつて、世界の何処に、いらっしやるんだか。昔の本にはみんな雲の上に載っている図が書かれていたけど、これだけ飛行機が飛び回る世の中になつても、天国を見つけたつて言う話も聞かない。私も、飛行機に始めて載つて、見渡す限りの雲海を見た時……。なんだか絶望的な気持ちになつたな。母さんが、ああまでして信じ続けている神様は、一体何処にいるの？つて感じがして」

彼女は幼げな丸い瞳を細くなびかせて、年齢の割に増せた印象を与える、冷たい笑みを浮かべた。

「今実在する世界を信じたくないから……。みんな、ありもしないものに、逃げるんだよ。真実の冷たさに、嫌気が差しているから……。嘘でもいいから、すがりたいんだよ。……。大人つて、みんな、意外に臆病なんだ。私達には、しっかりと生きなさいつて、くどい位に言うくせに、自分は、何処の誰が言ったか知らない、聖なる言葉を、一言一句漏らさず完璧に復唱しようと、のぼせたようになっている。……。お祈りをする時のお母さん、すごいんだよ。言葉と、言葉の間合いが、ほんの数秒ずれた感じがしただけで、細かい字で見開き2ページもある夜のお祈りを最初から、全部最初から、やり直しちゃうんだ。ううん、つて、変に神経質な咳払いをを何度もしてさ。あれを聞いていると、私まで、気が変になりそうになる。わたしは、子供の頃はお母さんと一緒にやらされたけど、大きくなつて部屋が別々になつてからは、全然やってない。やっているとは答えているけどね。隣の部屋の、お母さんのお祈りの声が聞こえるから、布団を頭までかぶつて、耳を塞いで、眠りに落ちるのを、今か今かつて、震えて待つんだ。あのううん、つて言う、もう二度

と聞きたくない不快な咳払いをまた聞く前に、って」

彼女は、また冷笑を浮かべた。彼の方を見るでもなく、一人、何かを思い出すように。

「私、滅びていくものを見るのが好きなんだ。昔、中学の体育館が立て直すために壊れされた時、重機で屋根が不格好に潰された体育館を見て、背中がぞくぞくする位、興奮したの。あの感覚、そう、あれは……」

「……まるで、エクスタシー」

彼女はそう言っつて、くすくすと笑った。エクスタシーという言葉の意味はあまりよくわからなかった。大好きなパンクロックの歌詞で知った程度だった。

「お母さんに言ったら、私はきつとまた、“悪魔の仔”だっつて言われるよね。でも、それでいいんだ。お母さんの信じるものを信じられない私は、自分の持つて生まれた感覚を信じて生きていくしかない。たとえそれが、悪魔の様な感覚だとしても、それが現実に存在するものである以上、本に書かれた聖なる言葉よりよっぽど、信じるに足りるものじゃない？」

そう言っつと、きらきらと輝いた瞳のまま彼の方を振り向いた。彼はそれに一瞥をもちれず、黙々と歩き続けた。彼女は、ふと微笑んだ後、瞳を狂喜に輝かせたまま、彼と同じように前を見ながら下校路を歩いていった。

「……だから、拓真は好きなんだ」

一人呟いた。そして、恥ずかしそうに笑った後、ポケットに突っ込んだままの彼の右腕に、自分の青白い腕を絡ませた。彼はうるさそうに彼女を睨み付けたが、かまいもしなかった。

そうして歩いたまま、住宅地の中を歩いて行った。

曲がっても曲がっても、同じような住宅と、同じような空が続く無限迷路のような街。囚われた者は、もう、何処へも抜け出すことは出来ないのか。彼女はふと、そんなことを思った。日常は、彼女にとっては、一種の迷路に似ていた。終わりが見えず、始まりも覚えていない。物事の進展すら計れない迷路の中で、毎日歩み続けるのは苦しかった。組んでいた拓真の腕を、強く、自分の身体に引き寄せた。

その時、隣を歩いていた彼の歩みが、ぴたりと止まった。不思議そうに彼の顔を見上げた。

その顔が、みるみる血の色を失った。

chap・2 : 悪魔の仔/湿った手・乾いた喘ぎ

彼女のみあげた拓真の顔は、驚きのあまり、目を大きく見開き、口を閉じることさえ忘れていた。顔面はすでに蒼白になり、身体はがくがくと小刻みに震えている。彼のポケットの中で、その手をしっかりと握りしめていた彼女の手に、じつとりとした、うす気味の悪い汗の感触が伝わってきた。

「……………、したの」

普段は表情を変えることさえ少ない彼に突然起こった変化に、ただならないものを感じた。こんな彼の表情は、これまで一度も見たとがなかった。

徐々に自分の身体も強ばってくるのを感じながら、我を忘れて彼の見つめる方向を見た。

そこは、あの変死事件が起こった公園の前だった。公園の入り口には、未だ黄色い規制線が張られており、公園前の道沿いには、数台の警察車両やメディア関係の車がずらりと並んでいた。そうした光景を遠巻きに見守るように、数十人ほどの野次馬が、たいした変化も期待できない事件現場を、さも関係者のような深刻な顔をして、腕を組みながら見つめていた。

しかし、それは事件の発覚以来、続いていたことだった。彼も彼女も毎日のように、その脇を通過して学校へ通学していた。彼を驚かしていたのは、そんなことではないようだった。

彼女はなおも付近を良く見渡してみた。だが彼の驚きに値するようなものは見あたらなかった。

「……………どうして、そんなに驚いてるの？」

もう一度、彼に尋ねてみた。

彼の口が、力なく動いた。

「……………あ、あ……………、……………」

喉の奥から、乾いてかすれた声が漏れてきた。

彼女は、もう一度人混みを見渡してみた。暇をもてあました様子の老人。失業者風の着古した様相の男。買い物帰りの奥様達。高校生、あるいは中学生らしき身なりの少女。中学生？……………いや、少し違う。あんな制服の学校は、この付近には無かった。それに、あの、包帯をしつかりと巻かれた右腕……………。何か、大きな交通事故にでも、会ったのだろうか。そんな子が、どうして、こんな場所にいるのか……………。その少女の様子は、考えてみれば少し怪しかった。しかし、それでも彼の驚きように釣り合う程、奇怪な印象は彼女は受けなかった。

「そこまでびっくりするような人、あの中にいる？……………一体、誰のこと、言ってるの？」

「コンピテント……………！」

彼は、一言、そう言った。彼の身体が、わなわなと震え出すのがわかった。

「コンピ、テント？」

彼の言葉を繰り返した。「なに？それ」

「……………じゃ……………、じゃあ……………、は……………、博士も、戻って……………？」

「拓真！」

彼の腕を掴んで、強く揺すった。

「どういう事？ちゃんと説明してよ！」

彼には、彼女の言葉は届いていないようだった。

体は今だ小刻みに震えており、目はいまにも、眼球が飛び出さんばかりに開かれていた。

その時、突然何を思ったか、彼は彼女の右腕をむずと掴み、ぐいと引自分に引き寄せた。そして、そのまま彼女の腕を引っ張って、人混みとは反対方向に、逃げるように駆けだした。それは、いつもの無表情な拓也では無かった。恐怖、ただそれだけに支配された顔だった。彼女の腕を掴んだ彼の手は、気味が悪いほどの汗で濡れていた。

由宇はこみあげてくるような恐ろしさを感じた。思わず、しっかりと掴んだ彼の手を払おうとした。しかし、その手は容易に切り離すことが出来なかった。びりびりと皮膚が裂けるような痛みが走った。

「腕が、ちぎれる！」彼女が叫んだ。「イタイ、痛いよ！」
「黙ってる！」

足をゆるめることなく、彼は恐ろしい顔で彼女を睨み付けた。彼女は彼の形相に、思わず身が萎縮した。

「……殺されるぞ……、俺だってばれたら……」

「殺される？」彼女が問い返した。

「ねえ、誰に？どうして？」

しかし、彼の耳に彼女の声はやはり届いていないようだった。

駆けだしたまま、彼は深く、何かに思いを巡らしているようだった。

「……さあ、どうする……、どう、すれば……？」

そのような言葉を、しきりにつぶやき続けていた。

由宇は腕を引かれるまま、青ざめた拓真の顔を見つめていた。

自分がどうなっていくのか解らない。彼と同じ恐怖が、彼女を捉えて離さなかった。

chap.2 : 悪魔の仔／震える背

「……どうしたの、拓真！」

玄関先に倒れ込んだ拓真と由宇を見て、彼の母は驚いたように目を丸くした。

「あら……、あなたは……？」

「……あ、……は、初めまして……、水貝、と言います、た、拓真君の同級生で……、」

由宇はうつぶせになっていた身体を起こして、何とかお辞儀をしようとした。

しかし、拓真は倒れながらも、未だ由宇の腕をしっかりと掴んで放していなかった。

彼女は思っように身体を起こすことすら、出来なかった。

「……それどころ、じゃ、ねえんだよ……」

うつぶせに転がったまま、拓真が、呻くように言った。

「母さん……、あいつだ……。博士の……、コンピ、テント……が……、」

その瞬間、拓真の母の顔に、さっきまでの柔らかな印象とは異なる、緊張の色がありありと浮かんだのを、由宇ははっきりと見た。

「……あなた、博士のコンピテントを知ってるの……」
彼の母は呟いた。

「……親父の残した記録の中に、最近取られた写真があったんだ……」

彼の息はまだ上がったままだった。せえせえと息を切らしながら、その合間を縫って拓真は話を続けた。

「…………あれに、うり二つの女が、さつき……。…………母さん、逃げよう！」

彼は突然身体を起こし、訴えかけるような目を母に向けた。

「あいつ、絶対、おれたちを狙ってくる！」

「…………大丈夫よ」

拓真の母は彼とは対照的に、落ち着いた調子で言った。

「…………あの子は、そんな子じゃない」

「現に、人が殺されたんだ！」

拓真が大声で言った。

「母さんが、何を知ってるかしらねえが、あいつは人殺しなんだよ！親父も言ってたじゃないか！あいつらは、殺すために、産まれてきたんだ……………」

彼は自分の身体を抱えるようにして、わなわなと震えだした。

「親父を、殺した奴も……………」

「…………大丈夫……………」

拓真の母は、震える彼の肩にそっと触れた。

「…………大丈夫だから、拓真…………、お母さんを、信じなさい……………」

拓真の母は、傍らに倒れ込んだまま、呆然と彼女らを見つめていた由宇に向き直った。先ほどまでの緊張の眼差しはすっかり失せ、初めのような、おっとりとした印象を与える微笑みを彼女に向けて、言った。

「水貝、さん、だったかしら…………、もう、ここへは、しばらく近づかない方がいいわ」

「…………どうして、ですか」

「いい？ここでのことは、内緒にしているね。……無用の混乱を招くだけだから」

無用の混乱。その言葉に、由宇の身体は無意識に震えた。

拓真の母は怯える由宇の心を見抜いたかのように、再び、彼女に優しく微笑みかけた。

「……大丈夫よ。ただ、念のため、というだけ。万が一、拓真の大切なガールフレンドに怪我でもさせたら、私、恨まれちゃうもの」

「……がつ、ガールフレンドって……」

「あら、違った？」

拓真の母は悪戯っぽく笑った。

「水貝、由宇さん、だっけ？……あなたの名前は、拓真が時々口にしてたから、そうなのかと思ってたわ。……友達のことなんて、話すことも珍しいのに」

由宇は驚いたように拓真の方を見た。

彼はすでに疲れ切つて、仰向けに床に伸びていた。意識があるのか無いのかすら、定かではなかった。

「……この子も、大分疲れちゃったみたいね。部屋まで運んで、休ませてやりましょう。……あなたも、眠っていく？」

「……いつ、いえ！」

由宇は琢磨の腕を振りほどいて立ち上がった。

「かつ、帰ります、私……。彼ほど、疲れて、無いですから……。あ、ありがとう、ございました……」

膝がまだカクカクとして、歩こうとしても力が入らなかった。

由宇はそれでも何とか玄関のドアを開け、お辞儀をして外へ出た。

背後のドアをばたりと閉めてしまうと、急に足の力が抜けて、立っていることが出来なくなった。閉めたばかりのドアに、身体を預けるようにして持たれかかった。

「……がつ、ガールフレンドって……」

彼女は、一人呟いた。

「……意識、してたんだ……」

足をぎくしゃくと不格好に動かしながら、日が暮れ始めた通りに出た。

近くの駅に電車が着いたばかりらしく、会社帰りの会社員が固まって通りを歩いていくのが見えた。一人の男が、ふらふらと歩いている彼女の方に目を向け、不審そうに顔をしかめた。

彼女は恥ずかしそうに目を伏せ、小さく会釈して、突然、駆け足で走り抜け、曲がらなくてもいい通りの角を曲がって、人気のない裏露地に入った。

彼女はその薄暗い湿った通りをゆっくりと歩きながら、先ほどの拓真の母の言葉を、無意識に、何度となく反芻していた。

自分の口元が、放って置いてもにやけてしまう。

「……気味が悪いな」

自分で自分をそう思いながら、彼女は家に向かって、出来るだけゆつくりと、ふらつきながら露地を歩いた。

「……でも……」

彼女はまた、にやつきながら小さな声で呟いた。俯いた口元から、小さく並んだ前歯が見えた。

「お母さんに言われる前に、言ってほしかった……かな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6879g/>

コンピテント / ガラスノコドモ

2010年10月21日23時28分発行